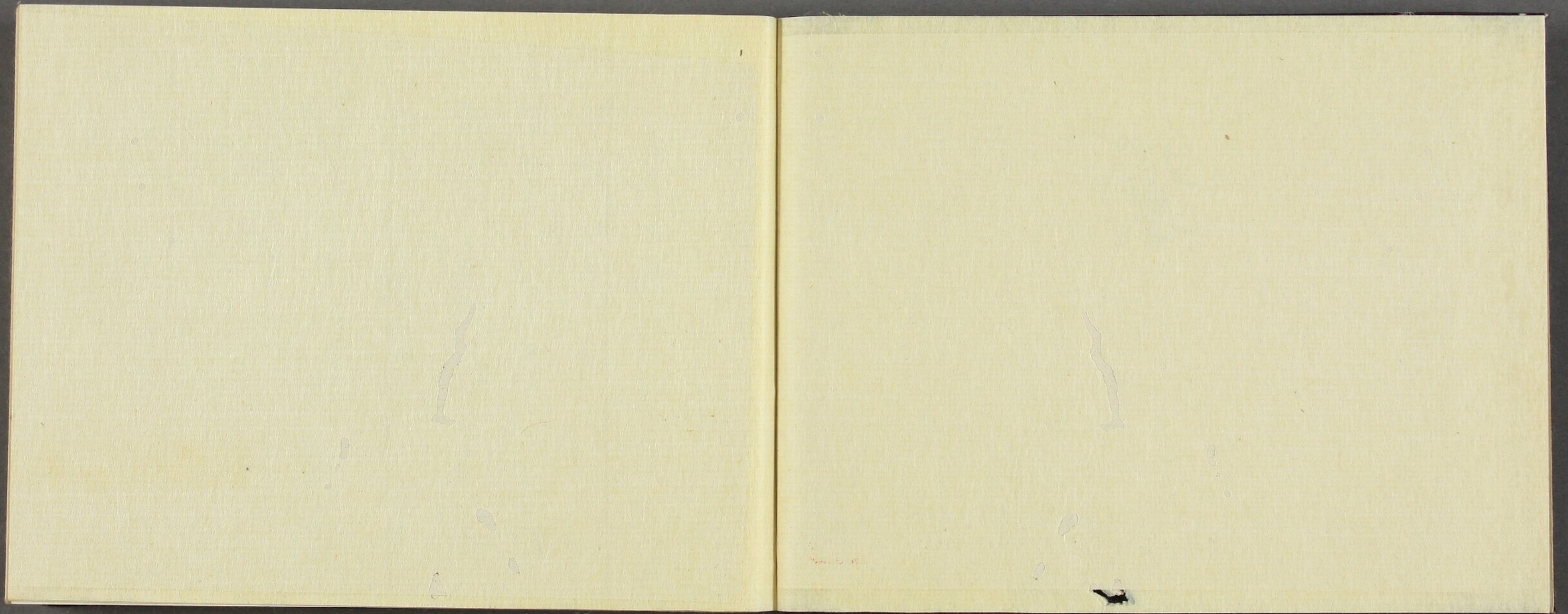


策





藤家集

以詞為卷若

詞云此と紀よりくはるとん元
為のうゝ系たはらす如
源比世九歳三月より十月
まゝの事こゝより柳枝の
同年たると也

内府のまはらへは
是の女方に中務の姫君は
ふり給事よとおもへる程
よきまじへくちやうも
あつ物つしやよあつ地を
進いもつこいといふ
心づより
おまへあよ 内府乃
心づよと記す
甲斐ももるなれといふ

あや夕暮れいよ
あや心いれあさほら内
に又中務のあまのあま
あや心づよといふ
あや心づよといふ
あや心づよといふ
あや心づよといふ
あや心づよといふ

あや心づよといふ
あや心づよといふ
あや心づよといふ
あや心づよといふ
あや心づよといふ
あや心づよといふ
あや心づよといふ
あや心づよといふ

とくくくくくくくくくく

わきまの海くくくくく

と又和同いっくくく

二月廿日 ハツカ 三葉書也

くくくくく

了極楽寺 在深草 昭宣云建五

深草天皇行幸芥河之時

昭宣云為殿上意供奉

天皇令好夢給有一多彈

之人其指入作凡件凡非

巧造之所及自然之宝物也

天皇常令隨身給自芥河

還御之間忽以紛失大驚

行召昭宣云被作下求造

之由昭宣云奉勅命起立

平心中被彩念云此凡不

求獻者今生之遺恨也

三宝了加護念給求以之

必了建立一伽藍也努力

不空求出獻之天皇殊以

感歎群生之中抽被仰
彼幼童之條定有被要會
趣七其長昭宣云極昇
道為果他日亦念立極系
古始云

極系云ハ代極家ノ墓也
字法也云ハ云ハ云ハ云ハ
深多ノ山洞云云云云
以云也云云云云云云

孝節主純兼平二年三月

廿七日曾太孫 穩子 於極系
為先考太段太長及先妣主
人原親主
出進福源法會云云

大宮山忌月蘭卷四月と
勅云云ハ誤也極服ハ行ケ
月と云云ハ只其日教と云
云云他令三月廿日忌日云
云ハ五月と云云ハ服日云
云ハ云云ハ八月乃廿日云
云ハ云云ハ云云ハ云云ハ

いふれ忘月うらゝい忘りさあ
れとも輕服申す月々今の
文分明也蘭十三日前の除服
は百五十日試すこゝ引あけ
て除服をらるるもつゝ是又
日次をらるるもつ引あけは儀
今とさるゝとあり
從定し令服彼条之服年一年は
謂以十二月為限不計因
月其五月以下並皆計日

君とらゝいよ 内大臣の御也
宰相乃申す 夕暮也
おとつおのりは
おとつおのりは
おとつおのりは
宰相のまこと 夕暮の外祖
母とらゝいよ
おとつおのりは
おとつおのりは
おとつおのりは
おとつおのりは

わんわんわんわん 内大臣うら
吟しあも〜 如神也
い〜うらさ〜 景気
よ夕音もおおひ〜
とれ〜
あ〜を
い〜
音乃ち〜入る神は
あめ乃の〜と早あ
〜くお〜

ちんちん

ちんちんちんちんちんちん

内大臣朝也

〜
考事或勅也

又赤辞勅也

字のこけりあ〜

而法の念ん 和法縁ん

祖母の地り〜

す〜

わんわんわんわんわん

いふくち

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あうすあうく いたいの

あつちのうら

けよいおひりり

内府の作れ〜西白

乃枝よ竹お〜り

中〜よあり

お乃中〜内大長

〜る年也

絵を〜あり

あ〜い

と〜い

か〜い

〜い

〜い

〜い

〜い

〜い

〜い

〜い

〜い

早下也

くらおうこく 夕音朝也
臆也引るもく 下おひも
おまひんも 中乃詞也
お塔中へ引も也
くろくもく 引もく
柏木下もくもくもくも
夕音乃引くもくもくも
まくもくもくもくもくも
まもくもくもくもくも
おまひんもくもくもくも
くもくもくもくもくも

城海女へ又もくもくもくも
早もくもくもくもくも
おまひんもくもくもくも
はくもくもくもくもくも
あまもくもくもくもくも
くもくもくもくもくも
引るもくもくもくもくも
教もくもくもくもくも
おまひんもくもくもくも
くもくもくもくもくも

よそにいふもさう月にはあふ
一節とあふすといふんあて
かたき

はしつゝ 夕暮の朝

も夕暮の朝もあふ
あふもさういふんあ
あふもさういふんあ
あふもさういふんあ

あふもさういふんあ
あふもさういふんあ
あふもさういふんあ
あふもさういふんあ

あふもさういふんあ

あふもさういふんあ

あふもさういふんあ

あふもさういふんあ

あふもさういふんあ

あふもさういふんあ

あふもさういふんあ

あふもさういふんあ

あふもさういふんあ

あふもさういふんあ

たふしむるにむかへては
たふしむるにむかへては
あふむるにむかへては
あふむるにむかへては
あふむるにむかへては
あふむるにむかへては
あふむるにむかへては
あふむるにむかへては
あふむるにむかへては
あふむるにむかへては

小方より此女房

内大臣の夕音と小方女房

あふむるにむかへては

あふむるにむかへては

あふむるにむかへては

事もおゆらる調也
あふむるにむかへては
あふむるにむかへては
あふむるにむかへては
あふむるにむかへては
あふむるにむかへては
あふむるにむかへては
あふむるにむかへては
あふむるにむかへては
あふむるにむかへては

あふむるにむかへては

あふむるにむかへては

あふむるにむかへては

あふむるにむかへては

あふむるにむかへては

あふむるにむかへては

— 此のいふこと —

— 海峽のあ

うにありはをせに中

りそさそらぬ— 念まれ

と— いか

いれはしゆのまゝ

夕音に信門より— 立身—

— ちんちん

— 男と記せ

— 此の海峽よ— あり

— 此のいふこと —

物もやま— 大なる

— ちんちん

— 海峽のあ

— 下ふ

春の光に— くれなく— ちん

— ちんちん

— 海峽のあ

— ちんちん

— 海峽のあ

おぼろけの世よりの世よりの世よりの世
よりの世よりの世よりの世よりの世よりの世
よりの世よりの世よりの世よりの世よりの世
よりの世よりの世よりの世よりの世よりの世

この世よりの世よりの世よりの世よりの世
よりの世よりの世よりの世よりの世よりの世

よりの世よりの世よりの世よりの世よりの世
よりの世よりの世よりの世よりの世よりの世
よりの世よりの世よりの世よりの世よりの世
よりの世よりの世よりの世よりの世よりの世

月はきりきりめく

あまの月よりの世よりの世よりの世よりの世
よりの世よりの世よりの世よりの世よりの世
よりの世よりの世よりの世よりの世よりの世
よりの世よりの世よりの世よりの世よりの世

夕暮の世よりの世よりの世よりの世よりの世
よりの世よりの世よりの世よりの世よりの世
よりの世よりの世よりの世よりの世よりの世
よりの世よりの世よりの世よりの世よりの世

有織ありし曰大長を厭
却しぬるはつしと
みしは傷より立身人
るはとふ身たつるは
源出よわも法よくある
るも実なる可ありと
ししなり

とまじかりぬる人

和身はみまをけけり也

モシ又籍も ケラウイ家礼といふて
バンセキ

史記曰高祖幸父大公之家
以家礼敬之高祖維子君
也太公維父臣也又云 漢書
六年高祖五日一朝太公如家
人父子礼大公家令詭太公
曰天無二日土無二王皇帝
維子人主也太公維父人
臣也奈何令人主誅人臣
如詭則威重不行後上朝
太公擁篲迎門却行上

けりききあつりしはとく
とつたはち云乃家令の太公
と記しるもつりて云記あり
ともさほもあかりし事也
かろししはとくしつたの
和と稱する詞也夕暮れ為
外習るはえ教訓もあつた
る也家礼の濫觴も又史記
と記しるもつりて家令の教
をけしるもあかりし事也

一記やうよそんしつりつ
衆曰史記高祖記單父人
呂公善沛令避仇從之客
因家沛亭沛中豪華之
吏因令有重客皆往賀
蕭何為主吏主進令諸
大夫曰進不滿千錢坐之
堂下高祖為亭長素易
諸吏乃始為謁曰賀錢
萬實不持一錢謁入呂云

大驚起迎之門呂公者好
相人見高祖狀貌周重
敬之引入坐酒闌呂公用
目固留高祖三竟酒
後呂公曰臣女好相人相人
多矣無如季相願季自
愛臣有息女願為季箕
帚妾酒罷呂媼怒呂公曰
公始常欲下奇此女與貴人
沛令善公求之不與何自

三妄許與劉季呂公曰非
兒女子所知也卒與劉
季呂公女乃呂后也生孝
惠魯元公主

後曰以既諸抄乃心不相叶
今門大臣夕魯此寬仁大度
乃人才之魁二漢高祖
此大以朝リ内存外男
叔父之好父の者三子
其月數三あり家令の

とすのこゝろを我々の
禮退大々言ひ言重致
手札の交ひするを以てこれ
といふに似て却ると云ふに
述懐乃朝也裏に雲舟
以門大官の許容を以て
非すと最初乃交と陳し
物詞也其故は呂太后と
父呂公、二言祖子と一けり
其母は呂媼、怯懦を以て

其父怒り鬼女子の如く
あつたといふやうに
書あるを以て好むを
云つた者乃朝也云々の
乃朝は門大官許容を以て
といふに似て却ると云ふ
也不然を以て朝は祖子
を以て

私家礼より宗室如何家
礼は夫より盤錫三家中

恩愛ノ礼ヲ云々知レ
内府ノ外男ト云々
セシムル事アリ
宗ノ人知ル也
云々
儒道ノ印
吾人儒者ノ師道ノ事
云々
内府ノ人知ル也

云々
急いそれ
云々
解るれ
云々
祖文祖
内府
云々
云々

随分殊勝と存せしむるは
うに作らるるはわがうた
吾れをうらうらとてあ
らうとて謝らるる也
心と心よくあはれん
心と心よくあはれん也
きと心よくあはれん也
公也夕音びりてうらとて
とらうとてあはれん也
若のうらとてあはれん

春のうらとてあはれん
君のうらとてあはれん
はれとてあはれん
あはれとてあはれん
君のうらとてあはれん
心と心よくあはれん
心と心よくあはれん
心と心よくあはれん
心と心よくあはれん
心と心よくあはれん

いふもなきしこあはれあつこ
いふもなきしこあはれあつこ
いふもなきしこあはれあつこ

下
御前ノ勅書ノ大長巻を
納言以下端より取り奉
りて御覧に盡し持返
す可也此書は唯拙
筆なり

下
徳直集とてしるせりこ
つとて人あむりおし

らぬよよきよすまらこいよ
はるまは
いふもなきしこあはれあつこ
物あはれしこあはれあつこ
あはれしこあはれあつこ
いふもなきしこあはれあつこ
いふもなきしこあはれあつこ
いふもなきしこあはれあつこ

いふもなきしこあはれあつこ
又平弱女多摩 夜米 幼婦 万葉

夕暮ゆふを井のつらに感
せんも南きんといは捨扱也
すじちうら 巡流也

七日夕にけしよ

下
月七日為魄 初学 七の

よしこまきみさう日
比とよまうさ上旬と
あま

けよまたたけのちうら

花ももほのまおれを

かたにこまにさうの
そとまき花も物さ
ちうら

あつたをいそれ

葦垣 信玄宗書

あつたをいそれをいそれ
天正己書
てふこまとおひこまとい

てふこまとおひこまとい

てふこまとおひこまとい

てふこまとおひこまとい

みづうらな 夕方の調

新しうらな

^{下拾}さびたうらな

かたうらな

^中河海よのうらな

かたうらな

かたうらな

かたうらな

かたうらな

かたうらな

かたうらな

かたうらな

かたうらな

かたうらな

かたうらな

かたうらな

かたうらな

かたうらな

かたうらな

かたうらな

寄宿すしむいふ也

あそんや 却たも可くも

中ねさきしへのぬけり

中ね花はよのさなぬ

中ね夕暮よりのあは

るさきしへのぬけり

ちぬけりしへのぬけり

さきしへのぬけり

さきしへのぬけり

さきしへのぬけり

を疑はもあふし又今ほ

けりし引遺恨もあふ

しれぬしへのぬけり

しつゝさきしへのぬけり

と夕暮にあはるさきしへのぬけり

とさきしへのぬけり

しつゝ

ねよちさきしへのぬけり

とさきしへのぬけり

とさきしへのぬけり

右直園府外散位等如
伴首宜兼知依伴給考

延暦十八年十二月廿日

息いよるころに おまは

沉醉よりこいむれ夕音

乃あきあしは也

人さきこころよ

人々行こころあつた

おこころよりあつた

田舎は朝也あきあつた

とらえんころあつたは

胡寝也

されあしころあつた

ねくされ乃あつた

夕音はあつた

御文にるはあつた

今あつたのあつた

物也

中くたつた あつた

返るあつたあつた

此よりして此の事なり
西井氏の返るにけしき
おほきよとたきくおんぬ
はしよくおまの也き
まゝらあしよひとを井
石のん中び案あては
長に秋さくくうぬ也
あつひのうく ねゆのふ
乃使よ程とぬ也あな
る也

中におくし地さなり

相本取中お也使とあり
らしぬ也 勅書とある

右近のうらち

右近将監いまた飯舞也

さうらひとせしとあり也

おまれ可もしーうは是

まごし ねり

けきはつよ ねゆのふ也

源氏乃調也

了
寛平遺誠在大将源朝臣

者切臣之授其年雄少

已就改理先年於女事

有所失

今更らくつらふ

夕吾び浮世の塵毒

お世にたはするのわらふ

ておしとちあてをいひ

さゆりもなをいさる

る甲もあつてさしおひ

ふいふいともおろし

おののこ

ゆき其家初よあはし

く厭却のきつら

の今はまけり若あさく

一ぬつとも母も何と

いさむも

まらふとも我のいさ

はあつとも我方よ

とあつてあつてあつ

らえく人見ひるくあ
り見言す此公あし
あも也

我人理道子年し
ゆらせさる事毎年の
也をさるるし

内こそおつる
本上と乃ぬ也あつは
大指る也面はちさる
指るれも下乃らいた指

よはさるもあし
いおもあし

うはは指にあし
て下に差地あし
るふあし
あもあし

しうらあし
夕暮れの中うらあし
る此縁組と海印のあ
す也

山子いふふと 深奥の

いふふといふふと

いふふといふふと

いふふといふふと

いふふと

いふふといふふと

いふふと

いふふといふふと

いふふといふふと

いふふといふふと

いふふといふふと

いふふといふふと

いふふといふふと

いふふといふふと

いふふといふふと

いふふといふふと

いふふと

いふふといふふと

いふふといふふと

いふふといふふと

位静安於清源殿始行灌

佛事

三子根源抄

西殿の母屋の西縁とこれ
て畫心とて撮一了此あ
とに山つととととと仙乃
々々々々々々々々々々々々
乃作物あり水の方子机
ととととととととととと
水と合らるる心集りあり

浦りて殿よりまきあぬ如
房は布絶とも色つとむ
すいさうととととととと
あるある或は箱乃つとよ
今々甚だ難所なりと出され
と教へたりて殿上の甚だ
乃ううとととととととと
布施のふとつととととと
殿前のふとつととととと
乃礼子とととととととと

法く此科に布施に紙と
る不系乃人此布施死人
とく此導師乃僧也此
有りて此等の作法を記
てると此法を了すに合
先導師此灌仏と云ふに
はすに此法を了すに
此と云ふは此を了すに
水を注ぎて灌仏して後
礼と導師此布施に

去りてく此法を了すに
天竺より来りて釋迦
如来此俱品藍城に
生れ給ふに天竺下
て此と云ふ法を了すに
ありて此法を了すに
即ち也
これより此法を了すに
親王大臣家より作法
おぼくは此法を了すに

神代文正為治

親王祇在家まておころえ

るに康和七年より

まねり也

西へくすむしとて

女房に布施ともなる

おとちると 灌仏の事

は昔に類を用し

中比よわ候まじり

ふらうしこと若つけ候也

親王紙五帖大中納之

四位五位二帖六位并童帖

お宿のさぬらう

内裏よりおころえ作

法と候まじり也

宰相のまじり

おあぬくお宿との事

おまじり

おまじり

わきまのまじり

おはるるおはるるおはるる

こころおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる
おはるるおはるるおはるる
おはるるおはるるおはるる
おはるるおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる

おはるるおはるるおはるる

女御北山ありき方 今皇乃
女御弘徽殿也二条御園
四君殿也

女御ありき方 二條御園

女御あり也

女御ありき方 白鳥也継母乃

故也

女御ありき方 女御あり

女御也今、梅紫の女御

女御ありき方 女御あり

女御ありき方 女御あり

女御あり也

女御ありき方 女御あり

女御ありき方

女御ありき方 女御あり

女御あり也

女御ありき方

女御ありき方 女御あり

女御ありき方 女御あり

女御也見古語於遠 日本紀云

神聖生其中者或此後之
已奈ノ前ノ一日ノ此後日
とらふ也此生前ノ神籠
ありしとき急母此後也
^中是以上百七〇のありし
まうてあり也此あり玉
依此ノ別雷神とらふこ
ろ一とらふとらふやき
此生しむとらふとらふ
こらふとらふとらふ

母子此後ともつたり神
籠にこらふとらふとら
あしこらふとらふとらふ
あふありとらふ
^同世俗此後とらふとらふ
乃みうとらふとらふとら
こ也こらふとらふとら
上まうとらふ也
あしこらふとらふとら
さうとらふとらふ也

此の御可もりて

是と女房は事也

まうみ日のあるら

白の日は曉也

ふまは 此御りて

此の御事之御也

此の御事 是と御事

娘君ももりて

此の御事

此の御事乃ありて

所えし言神也

中字の御事

此の御事

乃好也

此の御事

此の御事

此の御事

此の御事

此の御事

此の御事

此是所記のいふの如く
所也養子の事也

ろくけしといふは 女の事

事とあるは 女の事

記すは 女の事

御りといふは 子孫の事

乃如也

才ねといふは 人なり

養子の子孫の事なり

いふは 養子の事なり

乃身也 結好の事あり
てさといふは 人の事

何といふは 事なり

は腹の事なり 養子の

事といふは 世の事

はさるは 女の事

今語中のいふは 養子の

事なり 養子の事

事といふは 子孫の事

事といふは 人の事

故に榮耀をくもさるべし
ありし一息をよこす
也

んをらあまも

上達すべしとて一歩を
定む乃ち柳を子居給
の源氏の朝に檢校(出
給)也

近東河をこの使に

^中近東河をこの使に
近東河をこの使に

河をこの使に
近東河をこの使に
近東河をこの使に
近東河をこの使に
近東河をこの使に
近東河をこの使に
近東河をこの使に
近東河をこの使に
近東河をこの使に
近東河をこの使に

か乃大教す
相も也仍り大其意す
出立也了れよと遂中
とこもあてすまは

おぼろけのまじりも也

前白濁のすまじも 推定書お

也也夕音はらひ始人也

おぼろけのまじりも 海軍威勢

故うちまじりまじりしゆん

あり也

寧ろ乃中の 夕音也

うちまじりも 夕音はらひ

思ひてら申され也

くわむしりも 夕音乃

中井原のまじりも也

行いおぼろけ

夕音はらひも也

いおぼろけも也

ちまじりも也

おぼろけも也

しおぼろけも也

ちまじりも也

おぼろけも也

ちまじりも也

了
晋書曰邵詭字廣基
舉賢良對策為天下
才一為雍州刺史武帝
於東堂會送同詭曰
卿自以為何如詭對曰
臣對策為天下才一猶
桂林之一枝崑山之片玉
今以之課試及才之事
二作來也
菅原之良くなり竹

けり東くくしよきけり
久方有のりもあり
家の風もふもそり
葉風 桂葉風也持まり
柳桂ハ夕方あり文章
生かくありもあり
夢かくありもあり
るありもあり
るありもあり
桂ハ葉風也持まりあり

ふんも ねんも

ふんも ねんも乃ん也

ふんも ねんも

ねんも ねんも乃ん也

ふんも ねんも乃ん也

ねんも ねんも乃ん也

ねんも ねんも

ふんも ねんも乃ん也

ねんも ねんも乃ん也

ふんも ねんも

ねんも ねんも乃ん也
ふんも ねんも

ふんも ねんも乃ん也

ねんも ねんも乃ん也

ふんも ねんも乃ん也

ねんも ねんも乃ん也

ふんも ねんも乃ん也

ねんも ねんも乃ん也

ふんも ねんも乃ん也

ねんも ねんも乃ん也

師をばし習ふ事と付
まじはれしうらむ事
も

あつしと 習ふ事と付
に師をのばし習ふ事
と

あつしと 習ふ事と付
用事なれしうらむ事
と

あつらひのつらきも 轡車也

町古の女房としてくさくさ

ゆらゆらのおぼろの目より

おのれたちの縁の几丁を

あつらひのつらきも

はげの山と娘の轡車と

同じくあつらひのつらきも

上とつらきつらきあつらひ

しつらきつらき娘のつらき

つらきつらきつらきつらき

あつらひのつらきも

あつらひのつらきも

あつらひのつらきも

あつらひのつらきも

あつらひのつらきも

あつらひのつらきも

あつらひのつらきも

あつらひのつらきも

あつらひのつらきも

あつらひのつらきも

りあ也

うははよよよ 是よは

実子たてく愛憐乃

ふあも也

ふよふらあも

思ふ乃腹あふぬ実母

此心又娘君の心中と慕

しと只今うらうらに思

つらね人よふくもらぬ

愛の心あふくもらぬ

とたも也

ころころいふらよも也

母の心は是なるを深

くは夕暮と也好も也

三音すくも

かなとたもらもらも

りあも也あもあもあも

對面あも也

かまもいあも 是もも也

娘君はあもらもらも

年月乃る一に之を
花の隔にあらざる
心もあらざる

^園これ鬼のそ文字にあり
海あり

物もあらざる

空よりなる空をよび
空もなし(空もなし)
空もなし(空もなし)
空もなし(空もなし)
空もなし(空もなし)

又いふ

明石の女は空をよび
空もなし(空もなし)の
中に空もなし(空もなし)
空もなし(空もなし)
と知やうか(空もなし)
知うた空もなし(空もなし)
空もなし(空もなし)
空もなし(空もなし)

空もなし(空もなし)の 空もなし

ふらふらおぼろしき
かたしきしきおぼろしき
ふらふらおぼろしき
ふらふらおぼろしき
ふらふらおぼろしき
ふらふらおぼろしき
ふらふらおぼろしき
ふらふらおぼろしき
ふらふらおぼろしき
ふらふらおぼろしき

伊丹宿より一里外
舟のりゆ 海長隠居
出家のりゆ 舟のりゆ
舟のりゆ 舟のりゆ
舟のりゆ 舟のりゆ
舟のりゆ 舟のりゆ
舟のりゆ 舟のりゆ
舟のりゆ 舟のりゆ
舟のりゆ 舟のりゆ
舟のりゆ 舟のりゆ

一も也

互に心しよの 宛敷里也

一れも夕音よりうらむを

はとぬくひ夕音は跡若

あ〜も也

あまじ〜〜〜一松也

あ〜〜〜〜〜松

あ〜〜〜〜 海女共也

明年甲午也まねの内裏

よの山祭とよおこちもれん

とふかす也たけむけよの

ほ〜めとあねえらね

了れんつ〜いあ〜

執政人甲辰例

昭宣云 堀河殿 貞観七

年 甲午也

了れ秋を皇天也

例も九思〜 右上天皇

封戸二千戸 勅旨田千町

長冠天皇以下皆諡号

是也位よつ記取くる帝
此位とさうわてえ取つた
浦さう記取上天皇此号
也位よつ記取いさる人の
院号ありし教明太子
と小系院と号せし皇
子例を記す也但上
天皇と号をぬさるり
院月宮年壽封号あり
た上天皇の一事とさる所

あり是にすのりは物終
り所書女院ありしは六
条院の事なりと上夫
皇にちるもさうぬさるり
とさる人たりこれとほもの
脱履乃西門の号號あり
ら所ありし也西封ありし
小系院の院号の母西封
以下如先と宣下せし
上天皇此西封は合し

定しれどもある東宮
に食封二千戸ありて
茲武子のせしめし小
一系流に東宮母の食封と
すばきしとせしめし也
今源氏のまにち段有良
院考証ししより始り
ち段有良の食封は鎌倉
三千戸ありしより小
一系流乃倒しより二千戸

もはしりしなり
ふ始りしは但し
とより朝に二千戸ありし
くまはしりしより法成
と圓白の流に及んで食封
はしりしはしりしなり
とより別し言殊異なり
とより一系流乃正封あり
とよりしりしなり
とより何れもち段有良封戸

二千二百五十戸と云ふれり
いふなりけり信令の三子

戸分明也

丁改管此封戸二千二百

五十戸也右と云ふ是の二千戸

也而院号のよめりて封

と云ふなりけり

みよと云ふなりけり

年官年爵也之類の

封也封す也つと云ふ諸司

也つと云ふ爵也右と云

皇の給諸司元一人諸國

椽一人目一人一分三人爵

一人近代給と云ふは分毎

と云ふなり也右の諸

國目一分三人也

と云ふは是の事なり

清濁あり也あつと云

濁は不改也保長は言

ふ改有るなりけり改

三ノイシシトコロ
出隨身亦 将曹右府生た

普長 近衛 河原 別当

女院 同之 但武者所
隨身所至之

三内 下 院中 之作法

乃 今 一 式 儀 式 也

重 乃 一 式 儀 式 也

乃 今 一 式 儀 式 也

乃 今 一 式 儀 式 也

乃 今 一 式 儀 式 也

乃 今 一 式 儀 式 也

乃 今 一 式 儀 式 也

乃 今 一 式 儀 式 也

乃 今 一 式 儀 式 也

乃 今 一 式 儀 式 也

乃 今 一 式 儀 式 也

乃 今 一 式 儀 式 也

乃 今 一 式 儀 式 也

乃 今 一 式 儀 式 也

乃 今 一 式 儀 式 也

乃 今 一 式 儀 式 也

夕暮の鐘は紅く此の鐘
は紅くすれはあはれ乃
可くもさる
人よとさる
人よとさるぬるき弘徳
殿女御の袂好申すよと
はぬるも也をのた乃ち
く乃ちあつふよりいり
定りぬるぬる
給也

六位とくはし女侍巻よあ
也

あきみよりぬる
清縁の六位乃袍也其は
四位の袍也古の位叙三位
位の袍也古の位叙三位
之故著改袍之由旧記
見たり之位より一は
同色也と今世は
四位の袍もも別

なり 松嶽子 廣明の系孫
より中納言に任する 隆業
右大臣 徳とつとく けり 守
りいも 好ま 徳を ぬ け
こ 徳 徳 の 徳 徳 徳 徳
と あり けり 徳 徳 徳 今
七中納言の徳 徳 徳 徳
と あり 也
徳 徳 徳 徳 徳 徳 の 徳 徳
あり 徳 徳 徳 徳 徳 徳 徳 徳

くく あり 也

三葉 あり あり あり

徳 徳 徳 あり あり あり あり 也
徳 徳 徳 あり あり あり あり あり
徳 徳 徳 あり あり あり あり あり
徳 徳 徳 あり あり あり あり あり

正 徳 あり あり あり あり

夕 徳 中納言 あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり

里の川にさしあぐれ七枝
さしあぐれ

三葉殿下 大宮の住人

一山あり

おうむりへ 大宮北

七一町の事也又又昔

井原ともよこしりて

おのり一町の事ある

せんさいとも

白氏天集
舞練千下白地草八九條

帝稚書以人園林惠高

木

一山あり

志多入一町居古の

三行と神人とも成り

少人とも 大宮の

也百人なる

とも物あり 年月

あり事なる

此後ともあり

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

おれおれおれおれ

乃好也我老もももり
よふく—小松も若もも
と也小松も若もも
ふ人もももももも

靈椿一校老丹桂五枝芳
實禹鉤有子五人備備
備備俱登科馮道贈之
詩曰靈椿一校老丹桂五
枝芳 文苑聚為集七七

つりり かな

やと早らもも也

うねるももも

かなを丹もももにけ

もものむもももも

ふもよみもももも

まのり也

女ももあもも

二葉もももももも
らもももももも

一ノノノノ

神武天皇御宇

唐保二年十月廿二日

出禁宿殿自朱舊跡至朱

舊院入自永安坊就馬

坊殿作石大將源朝長下

令召召馬之於源朝長下殿

作畢立系上召大近女將

為之於先進立東階也

源朝長信也令馳為先

祇唯遲還本陣將左右

近將監以下近東以上各在

人起陣趨向山廐良久馳以

馬駐向馬駐左右大將下殿

執山馬養系上養之也

先十列
次南幸約者十人
隨次馳畢

乃也

唐保例也

乃也

昔昔節今の夜騎射
乃るありあわさるれを
まも調さよりありあわ
さるれをいす、似る也
いし、くさる也

御託云桑輿後相殿自
埒東急行到時未一刻
下輿暫入内 或抄ひう
くさる半時うら也
くさるき 英乃志

上乃右軍子錦とあは
かぶらう 軟障終を
うらる幕を、れやうる
也

之所、あろうもいあさ
御厨子所別當一人預
膳了、湯口、人、初、飼、四人
細代、未、え、れ

務事

先代舊事、本紀、日、献、出、餐

之母禱白而八玉神化移入
海底非出底填

之川一亦いふと其の悟を

とせしむる也る好まざる

れざる物とし也

コトも此の流しと

馬場殿より志ん殿より

つらおとすもまゝなるの事

らにうしあふとまよふ

也る事也也

一はあひ人 中まはる也

おる枝とて記し本事ある

西より枝のこゝろよりこれ

殊種好乃方也

西よりなる 主上朱羅院

也る也也

とんありて みるもん

一ありて 深長は西を

朱羅院乃次へる事と

とる也

行^レ御^レありあ^レり也^レと
朝覲行幸此作法也
くお^レ御^レあり也^レ朝覲
六上皇御孫一御子
あり也

池のい^レと^レ右乃^レ也

御^中紀延^レ嘉^レ八年五月廿日
從神泉苑西掖門入御
時殿左大臣傳令捕池泉
右東門御清徑御長持不

捕得魚^レ中覽^レ別^レ出^レ茶^レ料^レ
理供膳餘給侍長

多^レし^レ川^レと^レ也

延^レ嘉^レ七年十月十八日檢中

御^レ之^レ御^レ東^レ御^レ長^レ者^レ小^レ為^レ行

蜀^レ枝^レ立^レ階^レ前^レ差^レ之

同^レ以^レ作^レ法^レ之^レ事^レ也^レ御^レ心

又^レ物^レハ^レた^レと^レあり^レ鷹^レ也

あり^レと^レあり^レと^レ答^レ一^レ線^レ也

定^レれ^レ法^レ之^レ事^レ也^レ答^レ者^レは

高き山ありてはありては
精舎に勝者もすも
也奥の山前乃池より
ふよわればは時移る者
らる也又前夜遅速は
よらる也

おぼろおぼろ 後江おま作
びうもくし 山懐し調も
る也あもの品懐也
みこころもくしとらとら

玉卿取敵お事びりつる也
折櫃籠おあもくし池
まよよつとく始ら也

くお乃人かとも 地下衆也
おまもつたてふも
いしし 地懐るはあり
すも也

紫王恩 或抄玉乃恩
と報しとらとらあも
うらむしとらとらあも

水安と云ふ也

おほいとおほい

子息預物録は文章

端定候也

ある一打院 朱藤院の

おまの海を一打院

面をねたむいなり候也

と云ふはつらつら候也 海安也

今海安も古上とも云ふ也

とあるはつらつら候也

有候はつらつら候也

水もつらつら候也

候の物もつらつら候也

よりつらつら候也

むつらつら候也

つらつら候也

候のつらつら候也

つらつら候也

候もつらつら候也

つらつら候也

とてはていざなむかへしは也
ひきかひのきりかへり

別家なる一ふりうひと菊
るれは家の色とてうも也
雲禁中のりりるる
源氏の地を廢てり今
禁中ノ白位とてゆれ也
私りりるる此世の星は
台星乃心三台乃位なり
しとてりるる此世の星

て号号とてゆれ此の色
よふりるるた母とあり
ふれとてりるる号号とあり
繪りりるるしとあり

はとてありたれ

秋とてりるるはとありたれ
うりりるるるるるるるる
あつたあつたあつたあつた

白椽の二色ありあつたは
青色ありたありた也と

しるしに「*Comma*」の如
きものありては、
こゝに「*Comma*」の如
きものありては、
下をねむるありては、
ふと下をねむる也、
りもた乃を飼ふ也、
右のありては、
巻よる、
よる、

あし、
しるしに「*Comma*」の如
きものありては、
こゝに「*Comma*」の如
きものありては、
下をねむるありては、
ふと下をねむる也、
りもた乃を飼ふ也、
右のありては、
巻よる、
よる、

ふたつとてい 東宮のあり
る女房也日記以書月 二ノ字
女官百玉冠の中みえ
くう皇代の東宮とて
らうとあ也

うこのちう

宇多法師 和号はあや也

一巻の山は内裏焼亡こ

内裏失

朽とて

朱書記の巻也

はあしうのちかた
あまのいふあはれ
あつらふ早下れ調
るし一山在位乃りも
うらまはれしと也
あつらふしとて 我
いころ新卒をたれ根
印あま也

よのいふのあま

よのいふのあま

昔のさしとてはあはれ

ほの錦ちりしはあはれ

困困つた也

只今もとてあはれ

ゆほとえぬとてあはれ

錦ちりしはあはれ

はあはれ

まこととてあはれ 対あはれ

乃神傳代とてあはれ

みせぬとてあはれ

さしとてあはれ 吟泉院の

傳代といふものともあはれ

の夕音もあはれ 拙るる

のりさしとてあはれ

あはれとてあはれ

夕音もあはれ

一筆の西とてあはれ

ちも也

吟の歌上人 唱す歌上人

さしとてあはれ 昔のさし

宿務よりくまのすまね
人々をさるるのこゝろに
九は是の海軍軍艦の
況の記をさるるに
七は是の海軍軍艦の
をさるるに
をさるるに
をさるるに
をさるるに

海軍軍艦の
一也世名乃國義の
をさるるに

